



②

天才外科医との出会いは、1974年だった。当時、麻布高校1年の渡辺剛(55)は、友人から「面白いマンガがあるよ」と薦められた。手塚治虫の代表作の一つ「ブラック・ジャック」。将来が見えず、悩んでいた渡辺は、驚異的なスピードで難手術をこなす主人公に心を奪われ、以来、外科医になることしか考えられなくなった。

高校卒業後は金沢大医学部に進学し、心臓外科医の道を歩み始めた。32歳の時、ドイツで心臓移植手術を執刀。99年には内視鏡を使ったバイパス手術を世界で初めて成功させた。

現在は今年5月に開設した病院「ニューハート・ワタナベ国際病院」(杉並区)の総長を務め、年間約24

天才外科医 追いかけ



0例の心臓手術を手がける。心臓手術は通常、胸を25×30センチ切り、胸骨も切らなければならない。しかし、同病院では国内で唯一、外科手術ロボット「ダヴィンチ」を使い、小さな穴を4か所開けるだけで済むため、術後数日で退院できるという。

ロボットアームを繊細に動かす確かな技術を頼り、患者は国内にとどまらず、中国、ギリシャ、ロシアなどからも訪れる。まるで世

「ブラック・ジャック」と同じポーズをする渡辺。世界的心臓外科医だが、「僕はまだまだ、ブラック・ジャックには及びません」と話す

界中から難病の患者が集まったブラック・ジャックのよう。

◇「ブラック・ジャック」は1973年11月、週刊少年チャンピオンで連載が始まった医療漫画の先駆的存在だ。多額の手術料を要求する無免許の医者を主人公に、1話完結の人間ドラマが描かれている。医師免許を持っていた手塚が「こんな医者になってみたかった」という思いを込めた作

品で、数ある手塚の名作の中でも高い人気を誇る。

渡辺が昔から好きな一話は「死への一時間」。飲めば1時間で死ぬという毒物を飲んだ患者の心臓へ、ブラック・ジャックがタイムリミット目前でメスを入れ、命を救う。「普段は互いに反目しているライバル医師も巻き込んで、最終的に命を救う外科医の姿が見事に描かれているから」と渡辺は言う。

奇跡の腕で幾多の命を救うブラック・ジャックも時に医学の限界を感じ、「医者は何のためにあるんだ」と悩むシーンがある。渡辺は今でも仕事で迷いが生じると、原点に戻る思いで、単行本を開く。

◇医療機器メーカー「ジョンソン・エンド・ジョンソン」(千代田区)などほ2011年から、小中高生を対象にした「ブラック・ジャック セミナー」を開催している。医師の仕事に興

味を持ってもらうため、医療器具と鶏肉を使い、切開や縫合の手術体験ができる。これまでに全国で約150回開催し、約4000人が参加した。

「大学でもまだほとんどメスを使っていない。貴重な体験でした」。福井大学医学部2年の野坂裕(21)は、高校1年の時にセミナーに参加した。祖父をがんで亡くし、医師を志した。多感な中学生時代に読んだ「ブラック・ジャック」の影響も大きかった。

セミナーでは、電気メスで鶏肉を切った。緊張してゆっくり切ると、熱が切り口に均一に伝わらず、きれいに切れない。素早く切ろうとすると切り口が浅くなる。「ブラック・ジャック

には、全然たどり着けないな」と思った。将来は彼のように、確かな技術を持ち、誰よりも情に厚い医者になりたい」。野坂は、そんな思いを秘めて実習に励んでいる。(敬称略)